事表沙汰にする時ハ一番の騒擾なれば内分に事と治ること至様の分別なれ然らば此うくせんと両人篤と談合なし其翌朝両人打揃ふて長慈ぬしの庵前にいでお部屋花里殿と後室様玄院様の庵中近来何となう水と油の喩の如く打解けたまハざるやに考へ申すなり就てハ奥の調ハざるハ表の乱るゝ基此事遂にハ一藩の人心に関係まことき申難ければ情動殿の御賢慮を以て暫時花里殿を宿元へお下げ下さるやう委細ハ追て言上仕る事もあるべしと夫とハ無しに申出けり

○第六回

長慈ぬしハ家老野村多仲與老樹原源左衛門の言を聞き素より最愛い花里殿に多くの子まで（長男緑三郎長女おしづの他に三人の子あり）産せしものなれば片時も傍離すハ物憂けれど両人のゝふ處何彼様子のありげに聞ゆればさすが否とも拒みがたくやがて花里をば麹町なる親許伊勢屋善兵衛方へぞ下げにけるされど花里ハ長慈ぬしの内命ありて表向きこそ宿下げなれ内證ハお部家の取扱ひなれば外にありても何不自由なくなかくに吾儘と池に

し時々石田音次を呼寄て機會もあらば再度邸へ乗込様ての望を遂んものと尚も悪事の魂胆をぞ揺きける此て多くの月日と経て年號も萬延文久と改まりしゲその文久元年の頃かとよ岸和田より國家老岡部結城といふ者出府しけり此結城岡部家の門閥にて然も才智人に優れたれば一藩の人望もありて江戸家老野村多仲と勢ひ相譲らず両雄併立ざるの道理互に威權を爭ひて密に不快を狭みしかば一藩の人心も自然に二派に分れけり爰に又留主居役を勤むる高須剣といふ者あり此役を勤むる者の習ひ交際を名として日に青楼又ハ料理店に上るを常とせるが好年尚三十の上をいでざれバ當時大幣の君の聲價高き吉原金瓶楼の娼妓吾妻といへる者に精神を脱し公用に假托て吾妻の許に通ひ藩邸の金ハ更なり所々より金調して湯水の如く遣棄てけり一日のこと岡部結城と打連立て吉原に至り例の如く自己ハ吾妻結城にハ當時有名の娼妓某を配偶にさせしが結城ハ配偶の娼妓よりハ其座を周旋せしお玉といふ歌妓に想を懸け其後時々吉原に行通ひ例もお玉を呼てかにかくと言寄しが人ハ武士何故傾城にも狂句にもある如くお玉ハ結城を甚く嫌ひ如何にすれども靡かざれバ大ひに怨を